

## UNITY

～地域が笑顔に 地域が一つに～

JA 三島函南 青壮年部  
棚井 優

## 【私たちの想い】

私たちが辿り着いた願い。それがユニティー、【一つになる、統合する】という意味の、この言葉です。『生産者と消費者を』『地域を』『異なる世代を』一つにする。それが私たち活動の目標であり、すべてです。

静岡県東部にある田方郡函南町で農業を営む私たちが、このような目標にいたったのは、函南町という『ふるさと』の環境が、壊れていくように感じたからです。山間部の過疎化や局所的な平野部の都市化、さらに核家族世帯や一人暮らしの増加など。日本全体でも起こっているような変化が、地域活動や農家とほかの住民との繋がりを弱め、地域の絆がバラバラになってしまっていくのを、感じてきました。

『今、一つにならなければ、ふるさとが…地域の絆が壊れてしまう。』地域に根ざした農業者である私たちにとって、地域が壊れることは、農業が壊れること。UNITYとは、農業を、青年部活動をする中で辿り着いた、どうしても必要な願いなのです。

## 【2つの理念】

『地域が一つになる』ため、JA青年部の位置づけと、社会構造の検討を行いました。地域には、町会・子ども会など、多様な団体があります。地区の枠・役割を、出ることができない、そんな団体同士を結びつける、ヨコの連携強化が必要です。

一方で、当JAには、三島市・函南町と2つの行政が、さらに函南町には東西で2つのJAが、その内部においても、農業団体には行政、学校には教育委員会、いわゆる組織間…タテの流れは、複雑にできています。それぞれを円滑に結びつける、タテの連携強化も必要です。『その二つの課題をクリアできなければ、UNITYには結びつかない』それが、私たちの結論でした。

課題のために、私たちが選んだ方法は、食を通じた教育…食育活動です。その理由は2つ。家庭・学校など、地域の担い手・要になるのは、子どもたちではないでしょうか。子どもたちを核にして、活動を行うことで、地域につながりを作ることができるのではないかと。

もうひとつは、関わる範囲の広さです。食育には『農業・流通・教育・行政』とたくさんの団体に関わります。見方を変えれば、これをきっかけにタテ・ヨコの連携…地域を一つに

結びつけることができるのではないか、ということです。

それらの検討の中で、UNITYに並ぶ、もうひとつの柱となる理念、WIN-WIN が生まれました。食育の意義はとても大切です。けれど、少し冷たい意見かもしれませんが、意義だけでは、活動の継続はできません。活動は、メリットがなければ続かないからです。農業振興や、販売促進など、JAや青年部にとってメリットはあります。ただ、関わるすべての団体にメリットがなければ継続しない。経済ではいまや常識となっている、勝ち負けではなく、みんなが得をする、WIN-WINという発想。私たちは、UNITYとWIN-WIN、その2本の柱を基に、食育活動を通して、地域が一つになるモデルをつくり始めました。

### 【構想】

最初に挙げた通り、日本各地にある問題が集約されたような、そんな地域に住む私たちだからこそ『地域を一つにしよう！』そして、やるならば『日本全体で適用できるモデルを作り上げていこう！』そんな想いを皆で共有し、計画的かつ分析をしながら歩みはじめました。

ベースになったことは、青年部の先輩たちが30年ほど前から行っていた、小さな活動です。山間部の、全校児童100名程度の小さな学校で、子どもたちと一緒に栽培や収穫体験を、食育という言葉が大きく広まるずっと前、私たちの親世代から行っていたのです。私たちは、先輩たちから、ノウハウを学び、まとめていきました。

環境や児童数が異なる様々な学校で実践を重ね、モデル化を目指す中で、青年部員の経験・個性が発揮されます。各校のPTA会長・町会役員などを兼任している従来のメンバーに、青果市場・JA・文部科学省と教育改革を行った教育委員会の職員など、多様な経歴を持つ新規就農者が加わり、それぞれのアイデアを取り入れていきました。このモデルづくりのためには、部員のだれ一人として欠けては進まなかったと、いま感じています。

### 【モデルへの道程】

モデルの中で大切なのは、全ての子どもたちを対象にするために、学校の授業でやるということです。地域の要は子どもたちです。だからこそ、農業に関心のある一部の児童が対象では、地域が一つになることには結びつかないのです。そのため、粘り強く学校の先生と打ち合わせを重ね、ゲストティーチャーとして実践し、学校の研究授業や夏休みの課題とも連携しながら、3ヵ年計画でいくことを決めていき、モデルをつくりあげていきました。

実践の中で、学校との関わりや打ち合わせのやり方を学んでいきました。しかし、毎年担当の先生が変わってしまうことも多く、その先生の個性やこだわりも様々でした。時に、学

校の先生とぶつかり、『もう、やめてしまおう！』などと、発言がでることもありました。ただ、諦めてしまつては、そこでおしまいです。迷った時には、『子どもたちのために、地域のためにどうしたらよいか？』その原点に戻るよう、部員みんなで約束し、乗り越えていきました。そして、活動を続けていくために、文書化の必要性を実感し、マニュアルを作成。実践を進めながら、改良を重ねていきました。

### 【5つの展開】

私たちが作り上げたモデルには、5つのポイントがあります。

(1) 学校に誰かが来て、ちょっと変わった体験をするのでは、よくある体験学習です。

子どもたちの印象には残りますが、悪い言い方をすれば、ただのお祭り…。食についての教育…食育とは言えません。学校の授業として行うことや、事前に学習し、取り組むことが、このモデルにおいて重要です。そのため、あらかじめ調べ学習をしてもらい、栽培品目を選ぶなど、自ら学ぶことが主体です。子どもたちが主役となり、それをサポートしていきます。

学年や授業の趣旨をふまえて、一年を通して指導を行います。低学年には紙芝居風の説明を、高学年には学校祭での活用を提案するなど、子どもたちが受け入れやすく、学びやすい工夫をします。食育の意義にそって、意欲を引き出し、教育効果を狙っていきます。

(2) 『栽培をして、収穫をする…。』それだけでは食育というコンセプトの半分にも達していないと言えます。子どもたちが、栽培・管理・収穫、そして調理法を考え、調理し、その料理の意味や歴史などの学習内容を、レポートにまとめてもらい、学校で発表会を行います。そこには、私たちもゲスト参加。レポートを見ながら、子どもたちの料理を愉しみ、子どもとも、先生とも一つになって、喜びを分かち合います。私たち農家と学校が、このモデルづくりの過程で、一つに…、UNITYになっていきました。

(3) 食育を、地域のUNITYにつなげるには、子どもたちの成果を地域全体に広げる必要があります。『地域が、食育により一つの輪になっていく』そういった対外的な根回しは、学校関係者にとって苦手な分野です。反対に、地域のネットワークを持っている私たちには、簡単にできることです。お互いが得意なところを活かしながら進めていきます。

食物生産の要であるJA、教育はもちろん地域の要でもある学校、それらの推進役である行政や教育委員会。各組織が、一同に会する場として、青年部が審査会を用意

しました。子どもたちのレポートをもとに、各組織の代表者で審査し、優秀作品を決めます。そして、その審査会が縁となり、組織同士がつながっていきます。

(4) さらに、優秀作品を青年部が間にたって、スーパーや直売所などの小売店に掲示します。小売店側はレシピの提供による販売促進効果を、来店者はレシピを参考にすることができ、保護者は子どもたちの作品目的で来店します。そして、子どもにも、保護者にも喜んでもらい、誇りをもってもらうことにつながる。これが、みんなが得をする…WIN-WINな活動です。

(5) 実践の総括として、多くの地域住民が訪れる農業祭において、子どもたちの表彰式を行い、食育の意義・JA・青年部の活動・子どもたちの取り組みを発表し、励ましと地域へのPRを行います。子どもたちの緊張しながらも誇らしい顔、それを見守る大人たちの優しい笑顔が、『やってよかったな』と実感させてくれる瞬間です。

意識化のためのキャッチコピーの作成、視覚化のためのロゴマークのデザイン、マニュアルを活用しての定型化と、このモデルには、たくさんの工夫を盛り込みました。そのおかげか、子どもたちや保護者から、感謝の手紙をいただき、JA、行政、流通、各団体からも大きな評価をいただくことができました。『理念・構想・展開』をしっかり持つことで、このようなモデルをつくることができたのです。

### 【成果】

この取組の中でできた繋がりが、事業や成果として実っています。青年部員と、市場や小売店とのタイアップによる新しい加工品の誕生は、従来のジャムやジュースに加え、コロッケ、羊かん、焼酎と、様々な広がりをみせています。さらに、地区の団体や地元商工会と連携し、軽トラ市や朝市の開催、青年部員の顔、商品や直売方法がのったPR文書を作成し、個々の売上アップにつなげるなど、たくさんの成果が生まれました。

また、学校給食で青年部員の生産物が『石井さん家のイチゴ』といったように採用され、保護者への『給食だより』にも掲載されるなど、学校給食での生産物採用は、幼稚園・小学校・中学校、46校の全てで実現。教育との連携効果は、数字にも確実にあらわれています。ほかにも、学校からの畑訪問が当たり前になり、各家庭にも青年部員の存在が浸透、直売などの販売は好調です。

そして、この活動はもう一つの宝物を生み出してくれました。多くの議論を重ねる中でぶつかり、励まし合い、互いを理解することで様々な経験や、個性を持った青年部のメンバーたちが、一つに…、UNITYになっていきました。この食育モデルづくりがあるからこそ、

お互いに思いやり、災害時にも自然に助け合える、かけがえの無い青年部仲間になれたのだと思います。その絆は、行政の枠や、JAの違いなどを乗り越え、つながりは広がり続けています。

### 【私たちの願い】

こうして振り返れば、町の全人口の3割以上が、私たち食育事業の参加者です。私たちの地域で、後継者問題がほとんど発生していないのも、このような事業の継続があるからだと思っています。『明確な理念』・『現状の解析』・『確実な検証』、ビジョンと理論に基づくモデル化。そこに、『仲間の絆』が加わり、継続していくことで、各団体をつなげ、地域に一つの円環をつくることができました。そして、このUNITYの円環が、地域にとってプラスになるだけでなく、JAや青年部にとっても、さらなる発展を…WIN-WINをもたらしてくれています。

みなさん、冒頭にあげた2つの課題を覚えてくださっているでしょうか？『ヨコ…地域の連携』『タテ…組織の連携』。ヨコとタテ…それを超えていくことができるもの…それはなんでしょうか？そう…円なのです。この円環によって課題が解決されているのです。

様々な理由から希薄になりつつある、地域の結束…それは留めることは、難しいのかもしれない。けれど、農業という助け合いの精神を、当たり前を持った私たちなら、『食を通して地域を育てる…。』新しい地域の絆を創ることが出来るのだと想っています。

最後に、この円環の中心に据えたのは、「子どもたち」です。私たちの中にあるもう一つのキーワードは『子どもたちのために！』という熱い想いです。食育だけではなく、すべての事業が、このキーワードを基にしています。そして『子どもたちのために』にしたことが、私たちに笑顔を、共に作業することの楽しさを教えてくれました。円のように、還ってきたのです。

私たちの親世代から『子どもたちのために』という同じ想いでつながってきた活動、それを次世代につなげ、すべての世代とも一つになる。そのことで、地域につくった丸い円が、螺旋になって、『地域を一つ』にしていきます。『地域が一つになり、そして、この日本がもっと一つに、螺旋のように、続いていきますように…。』そんな大きな夢を持ちながら、UNITYの精神で、地域づくりを、これからも私たちはやっていきます！